

# 社会起業家のライフストーリー分析による起業要因の考察

羽田 拓也  
久 隆浩

近畿大学理工学部

## 1. はじめに

平成 18 年度の国土交通白書や中小企業白書では、従来の水準で行政サービスを提供していくことが困難になることを予想する一方で、人口減少・高齢化の進展によって地域経済を支える労働人口が減少していることを指摘し、地域における諸活動を誰が担っていくかという点を課題として挙げている。実際のまちづくりの現場においても、活動の担い手不足の声を耳にすることも少なくない。

しかし、まだまだ数は少ないながらも、社会起業家やコミュニティビジネスといった、地域における活動を生業(なりわい)とする人々も現れてきた。地域活動を無償ボランティアとして行なったり、本業とは別の副業として活動を担う状態に比べ、本業として取り組む場合には、資金面、時間面において活動継続性があり、信頼性も上がるため、地域にとって有益なことといえる。

こうした気運の高まりとそれを支えるための法整備や行政支援が相俟って、活動を生業とすることが以前に比べて容易にはなっているものの、現在の社会状況では多くの人々が地域活動を生業としていくには、まだまだ難しい状況にある。

このような背景のもと、本研究では、まちや地域を対象とした、あるいは、まちや地域に根ざした形で仕事を行う人々をまちの担い手として位置づけ、地域を対象とした仕事で起業するまでの経緯とその後の展開について分析を行なうことを通じて、社会起業家の起業要因を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、まず、新聞記事として取り上げられた社会起業家のインタビュー記事を記事データベースから検索し、インタビュー内容から起業における経緯や動機を抽出、整理を行なった。次に、主に神戸・阪神地域において実際に起業した人を対象として、ライフストーリー・インタビュー調査を行ない、分析を行なった。そして、それらの結果を総合して、社会起業家としての起業要因の分析を行なった。

## 3. インタビュー記事にみる起業要因

社会起業家に対するインタビュー記事を収集するため「日経テレコン 21」を用い、「まちづくり」「活動」「インタビュー」「きっかけ」「NPO」「コミュニティビジネス」「社会起業」「設立」といったキーワードを用いて検索を行ない、126 件の記事を抽出した。これらの記事を読み、起業の要因を抽出し整理したところ、「自己の感動体験の伝達」「感情体験が発端」「自己への問いかけ」「ふるさとへの思い」「地域に対する危機感」「同じ思いで活動する仲間・支援者の存在」「次代への継承」「参加後の

変化」の 8 つに分類できた。

「自己の感動体験の伝達」「感情体験が発端」「自己への問いかけ」は自分自身の問題である。自らの感動を人にも伝えたい、何らかの感情体験を契機として事業を始めるというポジティブな動機と、このままでいいのかという問いかけのネガティブな動機がここでは見られる。次に「ふるさとへの思い」「地域に対する危機感」は、自らが暮らす、あるいは暮らしていた地域への思いである。地域への愛着、そして、地域が抱える課題に対して何かをしなければという思いが起業のきっかけとなっている。また、「同じ思いで活動する仲間・支援者の存在」も起業の動機として働くことがわかる。さらに、「次代への継承」といった世代を超えた問題意識が起業の動機になることもある。「参加後の変化」とはボランティア活動のように気軽に始められる活動への参加が高じて、社会的起業に発展したものである。

表 1 インタビュー記事にみる起業要因

主な内容	インタビュー記事 (抜粋)
◇自己の感動体験の伝達	・天竜川の川下りに感動して、広島でも水上タグシーができないかと思ってた。 ・自転車はこれほど楽しいのかという感動体験を伝えたい
◇感情体験が発端	・病院が新しくなることは良いと思ってた。しかしシンボで、(豊洲などの)地域の財産を生かした街づくりについて聞き、深く感動し、すぐに会を立ち上げた
◇自己への問いかけ	・このままフリーランスを続けていて幸せだろうか。 ・生き物を大事に、保全を、というばかりで知らないうちに現場に負担を強いていたのではない。もっと現場を知り、解決法を探さなければ ・「なぜか」の「なぜこの場所があるのか」自問するうち建物そのものよりも、建物ができるプロセスに興味を持つようになった。 ・阪神大震災の際のボランティア活動で、肩書を捨て、裸のひとりの人間として目の前の状況に向き合う体験をした。被災者の生活支援をしながら、ここに仏教の原点があると思った
◇ふるさとへの思い	・仙台のリクルートにいた時、ふるさとで頑張っている東北の経営者との出会いが大きかった。社説にインタビューしながら求人広告を作った。自分のふるさとを考えたきっかけになり、大膽に帰って何かできそうな気がしてきた ・Uターンで東京から約 30 年ぶりに郷土に戻った時、過疎化が想像以上に進行していることにびっくりした。 ・第一勧業銀行に 20 年以上勤めたが、実家がミカン農家で約 10 年前に愛嬌に戻った。地域の置かれているきびしい現状を改めて実感した。地域に貢献したいと応募した。
◇地域に対する危機感	・きっかけは新卒だった。市の南を通過していく新幹線が開通すると、小諸は交通要所ではなくなってしまう。 ・汚れた新開川を目の当たりにして、有志 10 人で始めた川の清掃が活動の原点。 ・公共交通機関がなくなり市民の生活を支えているか、なくなって初めて理解されたと思ふ。存続を訴えるのはノスタルジーからではない
◇同じ思いで活動する仲間・支援者の存在	・フォーラムに参加した市民が、せっかく集まったのだからと、路面電車を活用した街づくりを自発的に組織しようということになった。 ・友人と二人で写実でまちおこしができないか始めたのが写実の会の出発点。 ・周りに同じ思いでUターンしてきた仲間が多かったことが、あおぞら組につながった。
◇次代への継承	・伝統(継)固まるのではなく、内外の新しい息吹も取り込んで、家業と地域を次世代に守り伝えようとしている。
◇参加後の変化	・私自身三年前、ボランティア組織の代表を務めた。最初がミミ袋くらいで良いだろうという軽い気持ちだったが、大掛かりな活動になってまちづくりへの興味が生まれた。

## 4. ヒアリング調査

### 4-1 調査概要

社会起業家を対象に、ライフストーリー・インタビュー調査の手法を用い、ヒアリング調査を行った。ライフストーリー・インタビュー調査の特徴から、具体的な質問項目を設定せず、対象者の語りの中から調査者が発問するという形をとった。

調査は 2007 年 11 月 26 日から 12 月 11 日の間に実施した。調査時間は各対象者に対し、1~2 時間で、調査者は、1~2 人である。

## 4-2 調査対象者の概要

調査対象者は、次の5人である。

### a) F.K さん（都市計画コンサルタント）

高校教員を13年間勤めた後、大阪の都市計画コンサルタント会社、東京の大手デベロッパー会社を経て、都市計画コンサルタント会社を設立し、独立。

### b) H.N さん（介護福祉サービス業）

大手コンピュータ会社を退社後、親の経営する看護婦家政婦紹介所に籍を置く。その後、介護福祉サービス会社を設立し、独立。

### c) H.T さん（地域情報紙編集業）

東京で学生生活を送り、就職する。その後、仕事を辞め、ノンフィクションライターのアシスタント等を経験する。関西に移り、結婚後、自治会報誌の編集や新聞社のレポーター等を経て、新聞社の地域情報紙の編集長になる。2001年に独立。

### d) M.Y さん（飲食店経営・商店街会長）

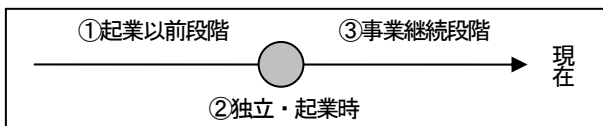
大学卒業後、家族で喫茶店を始める。その後、洋服店に業種転換後、現在の居酒屋を開店。震災を期に、商店街会長に立候補し就任。

### e) R.N さん（NPO 法人事務局長・まちづくりコンサルタント）

不動産会社に就職し東京に行くが、親の建材輸入会社を継ぐため神戸に戻る。震災時に、関西建築家ボランティアに参加したことを契機に、被災者の救援や被災地のまちづくりにボランティアとして関わるようになった様々な立場の人が自発的に集まり団体を立ち上げる。その団体を母体としてシンクタンクとしての活動を目的とした NPO 法人を設立。震災後、会社を辞め、妻の設計事務所に所属。

## 4-3 調査結果の分析

各調査対象者のヒアリング調査での聞き取り内容から抽出した項目を、①起業以前段階、②独立・起業時、③事業継続段階、の3段階の時系列で整理し分析を行なった。



### 起業以前段階

独立・起業をする以前の段階。学生時代以前や現職以前の職場での就労期間。

### 独立・起業時

それまでの職を辞し、自ら独立・起業した時点・時期。

### 事業継続段階

独立した事業を継続・展開し始めてから現在までの期間。

## 5. ヒアリング結果にみる起業要因

### 5-1 起業以前段階

起業以前の段階では、自己の内的な変化が仕事の変更、再開といったことの要因となっている。その変化を起こす外的要因としては次に挙げるものが起因となる場合が見ら

れた。

### a) 自己の内的な変化（内的要因）

◇仕事に対するモチベーションの低下

◇従来から持つ自己の願望実現欲求の高揚

### b) 自己の置かれた状況の変化（外的要因）

#### ◆地域環境の変化

・時代経過、周辺開発といったことによる地域の変化

・自然災害による変化

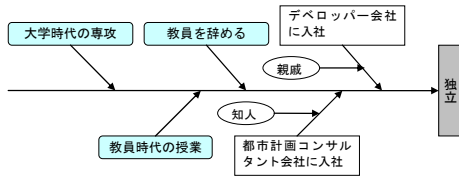
#### ◆法整備・時代の変化

内的要因及び外的要因に関する具体的な語りを表2に示す。

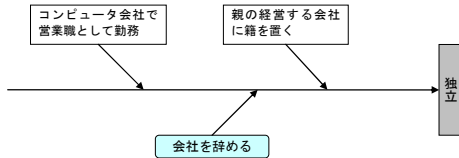
表2 起業以前段階に見られる要因

主な内容	対象者の語り（部分抜粋）
◇自分の当時の仕事に対するモチベーションの低下	<ul style="list-style-type: none"> <li>それは、大きくは2つ理由があって、もう教師がちょっとしんどいよね、多分俺は、その、この、自分で勉強するの好きだけど、…社会科の教師って知ってると思うけど、2時間くらいやったら7回もしゃべらなあかんっていう、7クラスあったらね、結構苦痛なんですよ。</li> <li>サラリーマン辞めたのは、単なる、5年きり…まあまあ将来が見えた、いややつやね、将来こういう人生、ライブ設計じゃないけど、課長になって、課長どまりでこういう人生を。(笑)…おもしろくないよ。(笑)まあ、営業会社から販売会社で毎日ノルマ満ちと毎月のルマと、自分の将来が見えたというか。</li> <li>親父が建築材料の輸入を始めてね、貿易屋さんなんですけど、戻ってきてほしいと、技術屋がほしいという風に言われて。まあ、建築材料の商売ってあまりね、情熱を感じないというか(笑)、自分ではやりたいことは違っていたと思うが一つあったんですけどね。</li> </ul>
◇従来から持つ自己の願望実現欲求の高揚	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育行政科生進学習専攻コースなんです。学校教育じゃないんですね。生進学習専攻コースって、何を勉強するかっていうと、公民館とか、近くのミュージアムとかね、大人の学習のこと勉強するコース出てるんで、ま、現代社会が一番近いねんけども、いつかはそういうことしたいよね、と思ってた。</li> <li>デベロッパーやってた時ちょうどマンションの企画とか、団地企画なんかをずっとやってたんで、色んなことばね、やり残したみたいになんかたくさんあって、…震災の年の4月の終業の頃に、親に言っただけで自分ちちょっと別のことがやりたい、というので会社を辞めました。</li> <li>ちょっと私も体を壊して、東京からこっちの関西のほうに帰ってきたんですよ。で、結婚したわけね。で、子育てしながら、だから、そのもういっぱい書くということとそこで何か、(子どもの頃、親が運動場で転んでいて、一つの場所に住み続けるというところは、どういうことか疑問に思っていた)そこで暮らさっててのがどういうことかな、というのと、書いていきたいな、というようなことがいつになんかドッキングされたのかも知れない。</li> </ul>
◆地域環境の変化 ・周辺開発といったことによる地域の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>(神戸の地下鉄が開通し、長田区の西側から西区のニュータウンに移動して、子どもたちの中に両方経験してる子がその当時多かったため。)2つのまちの成り立ち、どう違うんだろうとお互いのしんどいと思、と、どうなんだろというようにことをね、授業で、KJ法を使って大分授業をしたのね。</li> <li>昔は祭うたらのも、親、職員やったんやで、夜吉とか、自分経験あるか知らんけど、昔はこの辺に市場があって、大晦日なんかは人が通るべへんのやで、こんなや!!歩かべへん。もうちょっとか進めばいい。通かね。みんな大晦日に買い物すんねん、正月に新しい服を買って、大晦日にそれを履いて置いて寝て、それを明るく目、きれいなまっさらな下着を着て、おめでどうございます、というのがあれやっけど、そういう時代やうやう。</li> </ul>
◆自然災害による変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>そんな時、震災が起こったよね。震災は大きな転機だったかもしれないし、転機でもないけど、やっぱり、もともと人を知るきっかけにはなかったかもしれない。</li> <li>で、震災の時ボランティアを始めて、で、危険度判定とかね、そういうことをやってるうちに段々自分の住んでる地域、隣家の地域だったんですけどね、友人がそういう避難所の運営を任されて。</li> </ul>
◆法整備・時代の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の卒論もその当時、公書反対運動がいっぱいあったんで、公書反対運動の住民がどうやって学習してそういう運動したかとかね、そういうのを取上げた。今のまちづくりに近いでしょ。うん。だから、こういう時やがまさか来るとは思わなかったんで、これは大チャンスやなあ、と、公書運動に対して生進学習をみんなが学んでいって、企業とは違う案を作るとかね、地方自治の問題がすごく好きやったんで、地方自治の新しいあり方、これも地方主権、地方分権の時代やから、近いねん。そやから、今自分が、もともと問題意識持ってたことが時代のテーマになったんで、そういう意味ではええんですよ。</li> <li>だから時局に乗ったからな。(それは介護保険の)そうそう。まあ一つのそういう背景があるわな一つは、やっぱり悪い風…アゲインストで向かう時期とやな、だから変な話、簡単こいたら、たこ焼き屋やろうと思ったら冬場にするというのと一緒やわ。</li> </ul>
◆法整備・時代の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の卒論もその当時、公書反対運動がいっぱいあったんで、公書反対運動の住民がどうやって学習してそういう運動したかとかね、そういうのを取上げた。今のまちづくりに近いでしょ。うん。だから、こういう時やがまさか来るとは思わなかったんで、これは大チャンスやなあ、と、公書運動に対して生進学習をみんなが学んでいって、企業とは違う案を作るとかね、地方自治の問題がすごく好きやったんで、地方自治の新しいあり方、これも地方主権、地方分権の時代やから、近いねん。そやから、今自分が、もともと問題意識持ってたことが時代のテーマになったんで、そういう意味ではええんですよ。</li> <li>時局に乗ったからな。(それは介護保険の)そうそう。まあ一つのそういう背景があるわな一つは、やっぱり悪い風…アゲインストで向かう時期とやな、だから変な話、簡単こいたら、たこ焼き屋やろうと思ったら冬場にするというのと一緒やわ。</li> </ul>

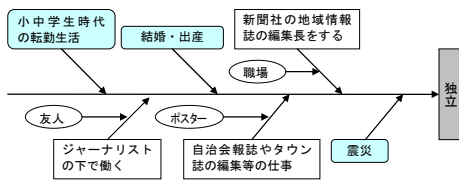
a) F.K さん



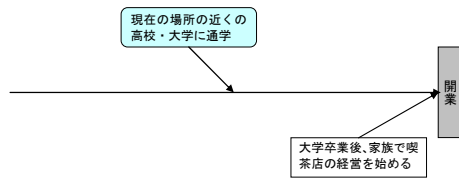
b) H.N さん



c) H.T さん



d) M.Y さん



e) R.N さん

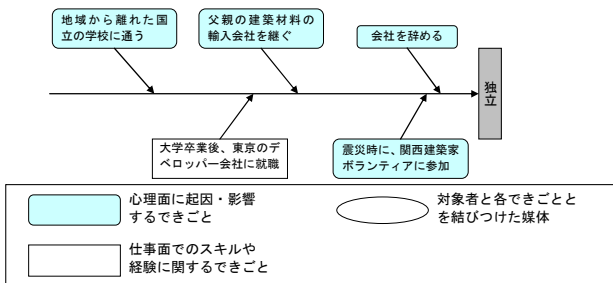


図1 各調査対象者の独立前の経緯と仲介要因

5-2 独立・起業時

ここでは、独立・起業の直接的要因を抽出している。独立・起業に踏み出す要因として、pull 要因と push 要因の2つがある。pull 要因とは、独立や起業に“引き寄せる”“向かわせる”要因であり、自分自身がやりたいことに対する家族や仕事上のスポンサーといった支持者や支援者の存在がある。push 要因とは、独立や起業に向けて“押し出す”要因である。独立以前の所属先等との考え方の相違といった事柄が挙げられている。これら2つの要因のうち、片方もしくは両方の要因があることで独立に踏み出すきっかけが生まれている。

また、仕事を行うためのクライアントや地域ニーズといったものを手に入れていることも独立・起業に向けて踏み出しやすい一つの要因であることも分かった。

表3 独立・起業時にみられる要因

要因	対象者の語り (部分抜粋)
pull 要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(妻が) 辞めろよ言ったら辞めたら、と、辞めたほうがいいと思う、って言うてくれてね、親にはちょっと内緒してたね、次の仕事決まってから言うたね、両親には、妻がそう言うてくれたのが一番大きかったよね。</li> <li>・クライアントさん達がね、「どうするんだ」とかって、「やるんなら今だぞ」とか「すぐにやんなきゃだめだ」とかね、みんなが言うてくれて。</li> <li>・自然に親父がこれをやろうって言い出したから、一緒に手伝って最初はね。</li> <li>・昔の仲間が神戸集まってね、一緒に酒飲んで昔の話が花が咲いたりして、でーまあそういうのからじゃあ俺ももう一回ね、かんまってみようかみたいよねことがあって、でーその勢いで会社辞めたみたいだね。</li> </ul>
push 要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の店を継ぎたかったんは、何でや、今から考えるとやっぱり、んー、大学も出て、教師してる人間が思ったんかもしれんね、ハハハ、分かんけど。</li> <li>・賛同という反対という、意見が合わなかったってのはあるからね、親父との意見、考え方の相違があって独立したっていう部分もある。</li> <li>・新聞社とけんかしたんだだけだね。(笑) ちよと良かった。そう、AN でない突然辞めたのよ、色んな経緯があって、ある日突然辞めちゃったんですよ、だから、読者にも申し訳なしね、クライアントさんにも申し訳なし、どうしようかだね、って思ってた。</li> </ul>

5-3 事業継続段階

事業継続段階では、事業を継続していくこと、新たな事業を創出していくことが必要となってくる。

そのためには、まず、自らの工夫として、実績や経験を蓄積すること、企画力を活用することが必要である。まずは、依頼された仕事を通してクライアントが満足する成果を残すことによって信頼関係を構築し、さらなるつながりや仕事に結びつけている。また、新しいタイプの仕事は経験を通じてノウハウを体得している。さらに、自らの持つ企画力を活用し、新たな仕事を創出している事例も見られた。一方、自らにノウハウがない場合は、ノウハウを持つ人材と知り合い、そのノウハウを提供してもらうこともある。さらに、外部と関わることによって、情報を入手し活用することで、事業の展開を図ることも挙げられていた。

表4 事業継続段階にみられる要因

主な内容	対象者の語り (部分抜粋)
◇仕事の創出・継続に関わる自らの工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今は、地方分権、地方主権の呼びんで、中央にそういうモデルがあるんではなくて、前の住民からちゃんとう、意見を聞いて計画を作ったあかんのですよ、それって、全部ワークショップ、ファシリテーションのやり方やね、だから、そういうところに得意なんで、色んなところから声がかかるんですね、逆に福祉専門やったら福祉しかわからんんですね。</li> <li>・いい仕事で返していくのと、売込みっていうのもやるね、売込みっていうのも露骨なものやなくて、ま、仕事頼まれてどうかね、思ったときにやります、ってことやるね、やってみます、や。もともと別の業界から来てノウハウ 0 でしょ、ミュージアムの展示企画なんかやりながら身につけたもんやし。</li> <li>・13とか14通りのプログラムを作って、でこういう風に分かれてください、っていうふうな学校側で提示してね、やると、我々が初めてちゃんと旅行会社からお金をとる仕事したんです、それを。それまでは勝手に来てね、でまあちょっと繋がりがだけばあーと見学してね、帰ってただけでも、まあそれだけでも地元の人には喜んでたんですけれどね、若い中学生とかね、そういう若い子がたくさん来て、被災地見て、見に来てくれると、それだけでも元気が出るなってなみたいな話があったんだけど、それをもうちょっとちゃんとプログラムしてね、地元にも少しお金が落ちるようになったんですね、で、我々は企画もやらうと。</li> <li>・今回の NPO なんかも東さんの出会いやね、NPO 立ち上げたのは、だからどうしても僕は営利法人では出戻らんもんがある、それが NPO 法人であると、で大きい領域に NPO がやると両方の強みを生かせる、仕組みを作ったと、だから僕は営利法人の社長であり、NPO 法人のま、ジョイフルの理事長もなってるわけ、まあそれはきっかけは東明子との出会いであって、NPO のまったく素人やったんやね、NPO があるのは知ってたけど、で、NPO とは、どう話を聞いて、これや、とって。</li> </ul>
◇外部との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・また、平成 12 年の介護保険、平成 9 年のベンチャースクールとかね、そういう、外部の関わりとかね、ベンチャースクールに参加したとか、そういう外部刺激を受けたというのはあるけどね。</li> <li>・僕は、あちこちの料理屋に行く方なんです、この辺の店でも、絶対行かない人おるもんねよそは見ないし。</li> <li>・僕は今県民政策部会、県民生活審議会っていうのがあって、その下に総合政策部会っていうのと、参画協同推進部会っていうのがあるんですよ、2 つね、で、その両方に委員のメンバーで入ってますんで、特に県の場合はその参画協同に関することやとかね、県の総合政策に関する県政のいろんな動きは全部わかるし、どんどん意見言うてるんですけどね、まあそういう一繋がりの中で、僕が主張したことは政策に繋がらな場合もあるし、逆に行政が勝つと考えて、やってくれそうところは神戸まちづくり研究所なんではないわというので、委員の打診があったりとかね。</li> </ul>



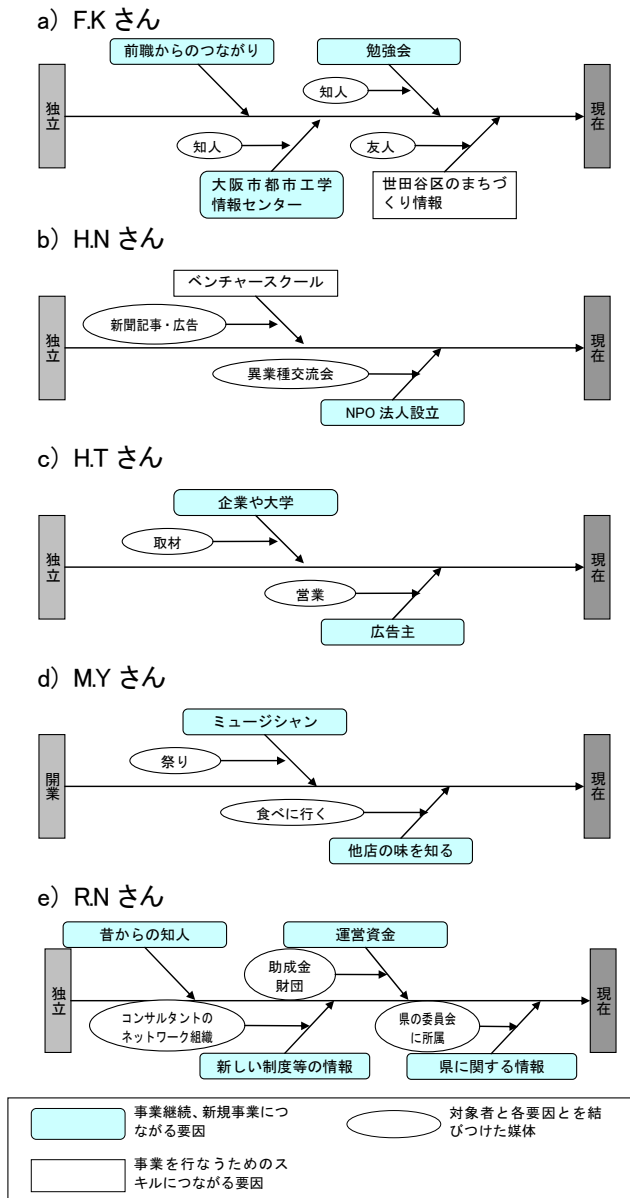


図2 各調査対象者の独立後の流れと仲介要因

## 6. 結論

以上の分析結果を通じて見えてきた社会起業家の起業要因では、まず、自らの意識が挙げられる。この事業で生計を立てていきたいというポジティブな思いが起業に駆り立てる一方で、従来の仕事を振り返ってこのままでいいのかといった思い、あるいは、会社や上司等との対立などのネガティブな転職動機が、起業要因となっている。それに加えて、コミュニティビジネスや社会的企業では、地域に対する思いが起業要因となっていた。地域への愛着、また、地域の変化に対する憤りなどが契機となって起業へと向かわせている。さらに、事業に対して理解してくれる家族や仲間も重要であることがわかる。とくに起業に踏み切る段階で、身近な人々の理解が起業の後押しとなることが指摘できる。

コミュニティビジネスはコミュニティの視点とビジネス

の視点の双方が必要であるが、言い方を変えれば、コミュニティマインドとビジネススキルの両面を兼備していることによって、起業が成立するといえる。分析結果からは、コミュニティマインドを備える場や機会として、地域を身近な存在として捉える時期があることがわかる。商売相手やクライアントとして地域の人々とじかに接したり、地震などの自然災害を契機として地域との関わりを多く持つたりするようになることがその例といえる。このように、自分なりに地域に関わることを実感する機会があることが必要といえる。

一方、ビジネススキルとして必要な営業力や経営感覚の醸成には、学校や専門の講座といった教育機関での習得のほかに、学生時代を含めたそれまでの仕事上の実務経験が役立っていることがわかった。

また、事業をはじめ、様々な場を通じて、ネットワークを構築していることが事業を進めていく上で多様な広がりを持たせていることも明らかとなった。調査結果からは、独立前後問わず、事業を継続したり、新たな展開を作ったりするために、あるいは、スキル向上のために、実際に人的ネットワークを構築していた。①人から紹介される②人が集まる場に出て行く③新聞記事などの媒体で知る、ことで人との出会いをつくり出していることが分かった。

こうしたネットワークの構築を行うために、起業家同士が集うことのできるような「場」を構築していくことが必要といえる。社会起業家は、事業展開を図る際など、当事者同士が実際に会うことが新たな事業を創出している。また、地域に根付いた活動を行なうことで、活動範囲がそれぞれの分野内に限定しがちになるため、他分野との交流することで、新たな事業展開の機会を創ることができるといえる。

また、社会起業家は、一人ないし少人数の組織で活動していることが多い。したがって、定期的な「場」への参加による新たな出会いを持つことが難しい。したがって、そうした「場」だけでなく、社会起業家のデータベースを持つ組織や機関を介して、接点を持つことで、新たな事業展開を図ることができるといえよう。

## 参考文献

- ・ 斎藤慎(2004)『社会起業家—社会責任ビジネスの新しい潮流—』岩波新書
- ・ 経済産業省関東経済産業局ホームページ  
[http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/community/index\\_about.html](http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/community/index_about.html)
- ・ 大阪 CB ネットホームページ  
<http://www.osaka-cb.net/cb/index.html>
- ・ 桜井厚(2002)『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- ・ 倉原宗孝・日景敏也・後藤由紀(1996)『主体の生活史や生活世界からみたまちづくりの意識に関する考察その1、その2』日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.591-592, pp.593-594